日本学術会議 北海道地区会議ニュース

発行　日本学術会議北海道地区会議

No. 53
2023-3

「日本学術会議、この一年」

第25期北海道地区会議代表幹事
（北海道大学客員教授・名誉教授）

但野　茂

長い間猛威を振るったコロナ禍も少しずつですが落ち着いてきたようです。道内の大学・高専、研究機関等の皆様方におかれましては、日本学術会議及び同北海道地区会議の活動に関し、日頃のご支援とご協力を頂き感謝申し上げます。今期の北海道地区会議は会員６名、連携会員58名で構成され、我が国の学術を支える地域活動を北海道で展開しています。昨年８月には、日本学術会議第三部会（理学・工学）および北海道大学との共催で、公開シンポジウム「地球環境の未来を考える－カーボンニュートラルの実現に向けて－」を会場とオンラインのハイブリッドで開催しました。道内の高校生を会場に招待し、総合討論で発表頂いたうえ、全国からオンラインで多くの参加がありました。講演者等との討論では、次世代を担う発言と提言に賞賛の声が寄せられ、シンポジウムは大変盛況のうちに終了しました。今後とも北海道地域に対する独自の活動を進めますので、宜しくお願いします。

さて、日本学術会議第25期も今年の９月末で３年の任期が終え、10月からは新たな26期がスタートすることとなります。今期は、令和２年10月の第181回総会で梶田隆章会長（ノーベル物理学賞受賞者）の新体制がスタートしましたが、新会員予定者105名のうち第一部（人文・社会科学）の６名が直前に総理大臣から任命されないという、いわゆる任命問題が生じました。日本学術会議では、早期任命を継続して要求するとともに、活動に対するさまざまな意見を受け止め、学術を身近なものへと自ら改善に取り組んでいます。この一年の動向をお知らせいたします。

任命問題が生じた総会の直後に梶田会長が井上大臣（内閣府特命担当大臣）（当時）と会談し、日本学術会議の在り方の検討に着手することに合意しました。学術会議では膨大な議論を経て、次の年の令和３年４月の第182回総会で「日本学術会議のより良い役割発揮に向けて」を決定しました。その主な内容は、(1) 国際活動の強化、(2) 科学的助言機能の強化、(3) 対話を通じた情報発信力の強化、(4) 会員選考プロセスの見直し、です。その後新しい取組みの準備が進んでいます。

一方政府の動きですが、昨年１月21日に総合科学技術・イノベーション会議有識者議員による「日本学術会議の在り方に関する政策討議取りまとめ」が公表されました。同日、梶田会長と小林新大臣（内閣府特命担当、科学技術政策）（当時）との面談が行われ、大臣からはできれば夏までには政府としての方針を示したいとの意向が示されました。総合科学技術・イノベーション会議の取りまとめに対し、感想と懸念事項を会長メッセージとして公表（２月１日）しました。９月に山際新大臣（内閣府特命担当、経済財政政策）（当時）と面談し、政府方針の早期公表についてお願いする文書を送付（10月）しました。学術会議としては任期改選が一年後に迫っており、その準備を進める必要がありました。11月には後藤新大臣（内閣府特命担当、経済財政政策）と面談し、政府の方針の早期公表を再度要請しました。

そして12月、後藤大臣から「日本学術会議の在り方についての方針」が公表されました。12月８日に臨時総会を開催し、直接内閣府から「日本学術会議の在り方についての方針」について説明を受けました。12月21日には内閣府から具体化検討案について説明と質疑が行われました。その際、法改正が準備されていることが明らかになりました。学術会議で

は、声明「内閣府「日本学術会議の在り方についての方針」（令和４年12月６日）について再考を求めます」を決議し、12月27日には会長名で、内閣府「日本学術会議の在り方についての方針」に関する懸念事項を発出しました。おもな内容は以下の通りです。(1) 法改正を必要とする理由（立法事実）が示されていない。(2) 会員選考に第三者委員会の設置が提起されており、学術会議の自律的かつ独立した会員選考への介入の恐れがあり、任命拒否の正当化に繋がりかねない。(3) 現行の三部制に代えて四部制が唐突に提起され、学問体系に則した内発的論理によらない政治的・行政的判断による組織編成案で学術会議の独立性が侵害されるおそれが多分にある。(4) 学術には政治や経済とは異なる固有の論理があり、「政府等と問題意識や時間軸等を共有」できない場合があることが考慮されていない。

今期通常国会へ３月までの法案提出が予定されています。学術会議の見解は、「拙速な改正法案の準備がなされようとしていることに強い危惧を抱いている。まず肝要なことは、日本学術会議と政府の間に真の信頼関係が構築されることである。このような努力を十分に行わずに、日本学術会議の独立性を危うくしかねない法制化だけを強行することは、真に取り組むべき課題を見失った行為と言わざるを得ず、強く再考を求めたい」です。詳細はホームページでご確認下さい。

最後となりましたが、現在の日本学術会議の活動状況ですが、カーボンニュートラル、パンデミックと社会、研究力強化、研究DXの推進、国際活動の強化等を総合的・中長期的な重要課題とし、若手アカデミー、アジア学術会議SCA、男女共同参画といった活動が進んでおり、課題別委員会、国際委員会等でさまざまな審議が行われています。また公開フォーラムやシンポジウムも多数開催しています。是非ホームページをご覧下さい。

（参考）日本学術会議ホームページ
https://www.scj.go.jp

公開シンポジウム開催報告

北海道地区会議では、市民公開の講演会等を毎年開催しています。令和４年度は、８月16日（火）にオンラインにて開催しました。

以下に当日の講演内容を報告します。

「地球環境の未来を考える～カーボンニュートラルの実現に向けて～」

日時：令和４年８月16日（火）
場所：北海道大学学術交流会館（札幌市）
（オンラインでの開催）

報告：日本学術会議第三部会員（公立はこだて未来大学教授）
大場　みち子

2050年までにカーボンニュートラル（ネットゼロ）の実現が世界各国の共有の目標となっています。カーボンニュートラルの実現には、あらゆる産業においてかつてない規模の社会変革・移行が必要になっています。本シンポジウムは、地球環境や気候変動とカーボンニュートラルの関係性やその実現に向けた産業構造の変革、地方創生との両立について先進的研究や事例を講演いただくとともに、カーボンニュートラル実現社会への期待や課題について、次世代をになう学生たちとともに考えることを趣旨として企画しました。

コロナ流行が続く状況下であり、会場に多数の参加者が集まって開催することは難しいため、昨年度及び一昨年度と同様に、オンラインを主体としつつ会場には関係者のみが集まるハイブリッド形式でシンポジウムを開催しました。

司会進行：竹内　佑介
（北海道大学研究推進部研究振興企画課長）

（1）開会挨拶
13：30～13：40　開会挨拶
梶田　隆章（日本学術会議会長・第三部会員、東京大学宇宙線研究所教授）
吉村　　忍（日本学術会議第三部会員・部長、東京大学副学長・大学院工学系研究科教授）
寳金　清博（日本学術会議連携会員、北海道大学総長）

（2）基調講演
13：40～14：15　「カーボンニュートラルの実現に向けて」
髙村　ゆかり（日本学術会議副会長･第一部会員、東京大学未来ビジョン研究センター教授）

（3）講演
14：15～14：40　「ゼロカーボン北海道：未来をつくること」
山中　康裕（北海道大学大学院地球環境科学研究院教授、国連大学認定RCE北海道道央圏副代表）

14：50～15：15　「北海道のバイオマス利活用の意義～事例を踏まえて～」
石井　一英（北海道大学ロバスト農林水産工学国際連携研究教育拠点代表、大学院工学研究院教授）

15：15～15：40　「東北の未利用資源の経済的な循環で創り出す未来」
北川　尚美（日本学術会議第三部会員、東北大学大学院工学研究科教授、ファイトケミカルプロダクツ（株）CTO）

15：40～16：05　「新しい九州経済を創りだす再生可能エネルギー」
木村　誠一郎（(一社）離島エネルギー研究所代表、（公財）自然エネルギー財団上級研究員、九州大学カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所招聘研究員）

（4）総合討論
16:15～17:35　テーマ「地球環境の未来を考える」
モデレータ　大場　みち子（日本学術会議第三部会員、公立はこだて未来大学教授）
パネリスト　髙村　ゆかり、山中　康裕、石井一英、北川　尚美、木村　誠一郎、藤岡　沙都子（日本学術会議連携会員、若手アカデミー会員、慶応義塾大学准教授）
高校生登壇者　北海道幕別清陵高等学校２年　櫻井　遥貴、北海道函館中部高等学校１年　阪口　大樹、市立札幌開成中等教育学校５年（高２相当）　林　綾奈、竹本　壮汰、小松　洋翔、平川　誠梧（以上Ａチーム）山田　煌太、田渕　萌花、山本　響輝、岡林ひかり（以上Ｂチーム）、立命館慶祥高等学校３年　草野　友果

（5）閉会挨拶
17：35～17：40　但野　　茂
（日本学術会議第三部会員・北海道地区会議代表幹事、北海道大学客員教授・名誉教授）

日本学術会議の梶田会長、吉村第三部会部長、そして北海道大学の寳金総長に御挨拶を頂き、シンポジウムが開始されました。

挨拶をする梶田日本学術会議会長（オンライン）

挨拶をする吉村日本学術会議第三部会員・部長

挨拶をする寳金 北海道大学総長

最初の基調講演では、日本学術会議第一部会員の髙村副会長に、カーボンニュートラルに関する世界的な取り組みの加速、異常気象による大きな被害などの気候変動の動向、カーボンニュートラルに向けた日本の政策、地方や国内外の企業の取り組みをお話しいただきました。カーボンニュートラルに向けた取り組みでは、金融が先導していること、日本の課題として、エネルギーの脱炭素化を加速、住宅・建物やモビリティの脱炭素化などを挙げられました。日本には世界一の再生可能エネルギー・燃料電池関連の特許数やEV技術の優位性という強みがあると期待感を述べられ、カーボンニュートラルを達成するにはこの先10年が勝負と締めくくりました。

講演をする髙村 東京大学教授

２つ目の講演では、地球温暖化に関する研究や2050年の北海道を考える地域づくり、環境教育に取り組んでいる山中先生が、ゼロカーボン北海道に向けた作戦とその解決の道筋を述べました。2050年カーボンニュートラルにむけての２つの作戦は、2030年までは既存技術・制度をフル活用して温暖化を防止し、2050年以降は北海道の課題とゼロカーボンを同時に対策することである。解決の道筋は、現世代が新たな仕組みを作る義務がある（しなければ「不作為の罪」）と指摘のうえ、これまでの経験を挙げつつ、「ユース世代には想いや実現する力はあるのだから、現世代は後押しする仕組み（特に心理的安全性）を作りましょう！」と力強く語られました。

講演をする山中 北海道大学教授

３つ目の講演では、バイオマスの利活用システムを提案している石井先生に、50年先を見据えた物（廃棄物とバイオマス）とエネルギーの循環システムのコンセプトと北海道バイオマスの利活用の状況や事例、そこでの課題や解決策をお話しいただきました。北海道のバイオマスのシェアは高い水準にあること、地消地産による経済・社会・環境の課題は４つのステップ（①循環利用の向上、②資源生産性の向上、③環境効率の向上、④外部資金流失の抑制）で解決を図ることが説明されました。バイオマスは発電事業に貢献するだけでなく、地域のエネルギーや資金の創出により、循環の駆動力になり、地域振興につながるとのウェルビーイングで持続可能な地域の明るい未来をうかがうことができました。

講演をする石井 北海道大学教授

４つ目の講演では、東北の未利用資源に注目し、稲の生育から最終製品化までを国内で実施する取り組みを北川先生からお話しいただきました。異なる産業で別々の原料から全てを製品化するマルチ生産プロセスで経済性を確保することを目指して、経済性の高い新技術（イオン交換樹脂法）を開発したものの、既存産業では異分野製品を扱うことが困難だったため、研究室の仲間が熱い思いで結集し、大学発スタートアップの会社を立ち上げたということです。利用油から高純度でビタミンE、バイオパラフィン他の製品化に成功し、残りは発電用に利用して廃棄物無しを実現するというカーボンニュートラルにつながる大いなる成果をあげています。これらの未利用油資源の完全利用により、持続可能な経済循環や地域の新たな産業の創出という明るい未来を描く話でした。

講演をする北川 東北大学教授

最後に、長崎県の五島列島の事例を参考にしながら、今後、再生可能エネルギーを使って、どうカーボンニュートラルにつなげるかを木村代表にお話しいただきました。講演は地域に再生可能エネルギー事業が生まれるということはどういうことか、再生可能エネルギーをさらに導入するには、何が必要か、カーボンニュートラルは世界をどのように変えるのか、という３つの視点からカーボンニュートラルへの取り組みをご紹介いただきました。再生可能エネルギーは自然変動性があるので、融通しあっていくことが一つのビジョンとの意見でした。洋上風力は日本の再生可能エネルギー事業を牽引する能力があるので、これを国際的につなげていくことも考えられると述べられました。

講演をする木村（一社）離島エネルギー研究所代表

講演の後は、大場日本学術会議第三部会員を座長として総合討論に移りました。総合討論では、パネリストと北海道内の高校生のみなさんとともに「地球環境の未来を考える」をテーマに議論しました。パネリストは、前半の登壇者５名と、日本学術会議連携会員、若手アカデミー会員の藤岡先生が加わりました。

はじめに、高校生５チームのみなさんから、討論テーマに対して、各自、あるいは各チームで、「バナナで考える地球環境」「～ Italiaから学ぶ～日本の目指すべき環境教育」「地球環境の未来を考える～日本がするべき投資～」「エネルギー転換の是非」「自然と人間の共生における新たなデザイン」という多岐にわたる発表をしていただきました。

続いて、日本学術会議連携会員で若手アカデミー会員の藤岡先生から、７月末に開催された日本学術会議「みんなで考えるカーボンニュートラルと化学」シンポジウムでの、「2050年にありたい社会の姿とその実現に向けた我々の役割」について、若者たちとの議論の内容を報告していただきました。

高校生からの発表

報告をする藤岡 慶応義塾大学准教授

総合討論

総合討論で発表する高校生

総合討論では、前半は登壇の高校生との対話を中心に進め、後半は前半の発表に対する質問を取り上げて、登壇者に回答をしていただきました。高校生たちが、地球環境の未来を自分ごととして考え、意見を述べていたことが大変印象的でした。

2050年のカーボンニュートラルの実現には本日のような世代を超えた議論が必要であることを強く感じました。「課題は山積みですが、これからも地球環境の未来をみんなで継続的に考えて、明るい未来を築いていきましょう」という言葉で総合討論が締められました。

閉会挨拶をする但野代表幹事

最後は、日本学術会議第三部会員、北海道地区会議代表幹事の但野先生に閉会のご挨拶をいただき、シンポジウムを終了しました。

終了後、集合写真撮影

令和４年度実施の地区事業（実施分）

○公開シンポジウム

令和４年８月16日（火）

北海道大学学術交流会館（札幌市）

「地球環境の未来を考える～カーボンニュートラルの実現に向けて～」

参加者271名

概要

◇司会　竹内　佑介

（北海道大学研究推進部研究振興企画課長）

◇挨拶

梶田　隆章

（日本学術会議会長・第三部会員、東京大学宇宙線研究所教授）

吉村　忍

（日本学術会議第三部会員・部長、東京大学副学長・大学院工学系研究科教授）

寳金　清博
（日本学術会議連携会員、北海道大学総長）

◇講演
「カーボンニュートラルの実現に向けて」
髙村　ゆかり
（日本学術会議副会長・第一部会員、東京大学未来ビジョン研究センター教授）

「ゼロカーボン北海道：未来をつくること」
山中　康裕
（北海道大学大学院地球環境科学研究院教授、国連大学認定RCE北海道道央圏副代表）

「北海道のバイオマス利活用の意義～事例を踏まえて～」
石井　一英
（北海道大学ロバスト農林水産工学国際連携研究教育拠点代表、大学院工学研究院教授）

「東北の未利用資源の経済的な循環で創り出す未来」
北川　尚美
（日本学術会議第三部会員、東北大学大学院工学研究科教授、ファイトケミカルプロダクツ（株）CTO）

「新しい九州経済を創りだす再生可能エネルギー」
木村　誠一郎
（(一社）離島エネルギー研究所代表、(公財）自然エネルギー財団上級研究員、九州大学カーボンニュートラル・エネルギー国際研究所招聘研究員）

◇総合討論
「地球環境の未来を考える」
モデレータ　大場　みち子
（日本学術会議第三部会員、公立はこだて未来大学教授）
パネリスト　髙村　ゆかり、山中　康裕、石井　一英、北川　尚美、木村　誠一郎、藤岡　沙都子（日本学術会議連携会員、若手アカデミー会員、慶応義塾大学准教授）
高校生登壇者　北海道幕別清陵高等学校２年　櫻井遥貴、北海道函館中部高等学校１年　阪口　大樹、市立札幌開成中等教育学校５年（高２相当）　林綾奈、竹本　壮汰、小松　洋翔、平川　誠梧（以上Ａチーム）山田　煌太、田渕　萌花、山本　響輝、岡林　ひかり（以上Ｂチーム）、立命館慶祥高等学校３年　草野　友果

◇挨拶　但野　　茂
（日本学術会議第三部会員・北海道地区会議代表幹事、北海道大学客員教授・名誉教授）

○北海道地区会議運営協議会
①令和４年６月９日（木）（web開催）
議題１　令和４年度日本学術会議北海道地区会議学術講演会について
議題２　日本学術会議サイエンスカフェの実施について

②令和５年３月開催予定（文書開催）
議題１　令和５年度事業計画について
報告１　令和４年度日本学術会議北海道地区会議事業実施報告について

第25期地区会議構成員

第25期北海道地区会議は、以下の会員および連携会員で構成されている。

［会　　員］

石塚真由美	第二部会（北海道大学大学院獣医学研究院・教授）
宇山　智彦	第一部会（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター・教授）
大野　由夏	第一部会（北海道大学大学院経済学研究院・教授）
大場みち子	第三部会（公立はこだて未来大学・教授）
但野　　茂	第三部会（北海道大学客員教授・名誉教授）
渡辺　雅彦	第二部会（北海道大学大学院医学研究院・教授）

［連携会員］

有村　博紀	北海道大学大学院情報科学研究院・教授
石井　哲也	北海道大学安全衛生本部・教授
石田　晋	北海道大学大学院医学研究院・教授

上田　一郎　北海道大学名誉教授
上田　佳代　北海道大学大学院医学研究院・教授
臼杵　勲　札幌学院大学人文学部人間科学科・教授
内山　幸子　東海大学国際文化学部地域創造学科・教授
大野　宗一　北海道大学大学院工学研究院・教授
大場　雄介　北海道大学大学院医学研究院・教授
岡部　聡　北海道大学大学院工学研究院・教授
尾崎　一郎　北海道大学大学院法学研究科・教授
笠井　久会　北海道大学大学院水産科学研究院・准教授
片桐　由喜　小樽商科大学・教授
河原純一郎　北海道大学大学院文学研究院・教授
菊地　優　北海道大学大学院工学研究院・教授
北　裕幸　北海道大学大学院情報科学研究院・教授
小柴　正則　北海道大学名誉教授
後藤　貴文　北海道大学北方生物圏フィールド科学センター・教授
齊藤　正彰　北海道大学大学院法学研究科・教授
櫻井　晃洋　札幌医科大学医学部遺伝医学・教授
笹木　敬司　北海道大学電子科学研究所・教授
佐藤　典宏　北海道大学病院・病院長補佐 / 臨床研究開発センター・センター長、教授
澤村　正也　北海道大学特別教授、大学院理学研究院・教授、安全衛生本部・副本部長
相馬　雅代　北海道大学大学院理学研究院・准教授
都木　靖彰　北海道大学大学院水産科学研究院・教授
髙橋　素子　札幌医科大学医学部医化学講座・教授
武冨　紹信　北海道大学大学院医学研究院・教授
田髙　悦子　北海道大学大学院保健科学研究院・教授
玉腰　暁子　北海道大学大学院医学研究院・教授
辻　康夫　北海道大学法学研究科附属高等法政教育研究センター・教授
中小路久美代　公立はこだて未来大学・教授
長里千香子　北海道大学北方生物圏フィールド科学センター・教授
名和　豊春　元北海道大学総長
西野　吉則　北海道大学電子科学研究所・教授
西村　正治　北海道呼吸器疾患研究所・理事長、豊水総合メディカルクリニック・医師、北海道大学名誉教授
庭山　聡美　室蘭工業大学大学院工学研究科・教授
野口　伸　北海道大学大学院農学研究院・副研究院長、教授
橋本　雄一　北海道大学大学院文学研究院・教授
長谷山美紀　北海道大学大学院情報科学研究院・教授
波多野隆介　北海道大学名誉教授
羽山　広文　北海道大学名誉教授
樋田　京子　北海道大学大学院歯学研究院・教授
氷見山幸夫　北海道教育大学・名誉教授
藤田　修　北海道大学大学院工学研究院・教授
船水　尚行　室蘭工業大学理事・副学長
古屋　正人　北海道大学大学院理学研究院・教授
寳金　清博　北海道大学総長
本間　研一　北海道大学名誉教授
本間　さと　特定医療法人社団慶愛会札幌花園病院睡眠医療センター・センター長
真木　太一　北海道大学農学研究院・研究員、九州大学・名誉教授
三澤　弘明　北海道大学電子科学研究所・特任教授
南　雅文　北海道大学大学院薬学研究院・教授
美馬のゆり　公立はこだて未来大学システム情報科学部・教授
村越　敬　北海道大学大学院理学研究院・教授
森本　淳子　北海道大学大学院農学研究院・准教授
山口　佳三　北海道大学名誉教授
山下　啓子　北海道大学病院・教授
山下　竜一　北海道大学大学院法学研究科・教授

（氏名は五十音順）

日本学術会議北海道地区会議事務局
北海道大学研究推進部研究振興企画課
〒060-0808　札幌市北区北８条西５丁目
電話（011）706-2155　ＦＡＸ（011）706-4873